方向

第一五〇号　一九九二年一二月一日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

原田憲雄

陶器・盲目の偈　―法華経巡礼　78―

1992 11 15

05-30. さて、世尊は、この意味をさらに示そうとして、そのとき、これらの偈を説かれた。

atha khalu bhagavān imam evārtham bhūyasyā mātrayā saṃdarśayamānas tasyāṃ imā gāthā abhāṣata //

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。

05-31. 月と太陽の光が、平等に人々を照らし、

善人にも、悪人にも、光に過不足のないように、（45）

如来の智慧の光も、日月のように平等で、

一切の衆生を訓練して、それは不足も過剰もない。（46）

たとえば、陶工が、陶器を同じ土でつくるのに、

その容器が、糖蜜用、ミルク用、酥油用、水用となり、（47）

あるものは不浄用、あるものはヨーグルト用となるが、

同じ土からつくるのだ、さまざまな容器を、陶工は。（48）

どんな物が投げ込まれるかによって、容器は特色づけられる。

衆生に差別はないが、愛好に差異があるために、如来たちは、（４９）
乗の差異を説かれるのだが、仏乗こそ、決定的なのだ。
輪廻の輪に無知なものは、寂静についても知らない。（５０）
諸法は、空であり、無我である、と知るものは、
正しくさとった世尊たちの菩提を知るのだ、真実に。（５１）
中等の智慧にとどまるものが、独覚といわれ、
空についての智慧を断念するものが、声聞といわれる。（５２）
一切の法を理解することによって、正しい覚りをえた、といわれ、
幾百もの方便で、常に、法を説かれる、命あるものたちに。（５３）

candra-sūrya-prabhā yadvan nipatanti samaṃ nṛṣu /
guṇavatsv atha pāpeṣu prabhāyā nona-pūṛṇatā //45//
tathāgatasya prajñā ca bhāsad(W:prajñ'ābhā samā hy) āditya-candravat /
sarva-sattvān vinayate na conā naiva cādhikā //46//
yathā kulālo mṛd-bhāṇḍaṃ kuruvan mṛtsu samāsv api /
bhavanti bhājanā tasya guḍa-kṣīra-ghṛtāmbhasām //47//
aśuceḥ kāni-cit tatra(W:kāni-cid arthe) dadhno 'nyāni bhavanti tu(W:ca) /

mṛdam ekāṃ sa gṛhṇāti kurvan bhāṇḍāni bhārgavaḥ //48//
yādṛk prakṣipyate dravyaṃ bhājanaṃ tena lakṣyate /
sattvāviśeṣe 'pi tathā ruci-bhedāt tathāgataḥ //49//
yāna-bhedaṃ varṇayanti buddha-yānaṃ tu niścitam /
saṃsāra-cakrasyājñānān nirvṛtiṃ na vijānate //50//
yas tu śūnyān vijānāti dharmān ātma-vivarjitān /
saṃbuddhānāṃ bhagavataṃ bodhiṃ jānāti tattvataḥ //51//
prajñā-madhya-vyavasthānāt pratyeka-jina ucyate /
śūnya-jñāna-vihīnatvā cchrāvakaḥ saṃprabhāṣyate//52//
sarva-dharmāvabodhāt tu samyak-saṃbuddha ucyate /
tenopāya-śataiir nityaṃ dharmaṃ deśeti prāṇināṃ //53//

譬如日月光。平等照三千。於善及於悪。而光無增減。如来智慧光。平等如日月。教化諸衆生。無増亦無減。
如瓦師作器。平等和土泥。於中器或盛。沙糖乳酥水。或有盛不浄。或有盛於酪。彼唯取一泥。瓦師用為器。
若物墮其内。因彼知器名。如衆生無余。如来随別欲。雖説乗差別。決定唯佛乗。無智故輪転。而不知寂滅。
若人能知空。遠離於法我。彼知仏世尊。所得正真覚。安置処中智。説名縁覚者。空智教化已。顕名為声聞。
若能覚諸法。説名正遍知。

05-32. たとえば、生れついての盲目の人が、太陽や月や星たちを
見ないので、「形あるものはどこにもない」というようなもの。（５４）
生れついての盲目の人に、偉大な医師が、慈悲をいだき、
ヒマラヤにゆき、そこを横ぎり、登り、（５５）
一切の色・味の要素をもつ山の薬草
をはじめ、四種を得て、調合し、（５６）
あるものは歯でかみくだき、また他のものは突き砕き、
針の先で体に入れて、生れついての盲目の人を治療する。（５７）
かれは視力を得て、太陽や月や星たちを見、
考えるだろう「前は無智であんなことを言ったのだ」と。（５８）
同様に、衆生たちはたいへん無智で、生れついての盲目として、輪廻し、
縁起としての輪を知らないので、苦の道をさまよう。（５９）
無智迷妄の世間のうちに、一切を知る最高者の
如来は、偉大な医師として現れた、慈悲を本質として。（６０）
方便に巧みなこの導師は、妙法を説き、
無上の仏道を説かれるのだ、最高の乗のひとたちに。（６１）

師は明かされる、中等の智者には中等のを。
そして、輪廻を恐れるものには、他のさとりを賞讃される。（62）
三界から解放された声聞は、考える、
「このようにしてわたしは達した、汚れなく、楽しい涅槃に」と。（63）
そこでわたしは説き明かす「それは涅槃とは言えない。
一切の法がさとられたとき、不滅の涅槃に達するのだ」と。（64）
それは、偉大な聖仙が、あの男に慈悲をおこし、
語るようなもの――おまえは愚か者。わたしは智者だ、などと考えてはならぬ。（65）
おまえが、障壁に囲まれた中にいるとき、
外で起ったことはわかりはせぬ，おまえのような浅智慧の者に。（66）
中にいる者には、外にいる者にわかっている、なされたか、なされなかったかが、
現にわからない。どうして浅智慧のおまえに知られよう。（67）
ほんの五ヨージャナのところで，音がしたとしても、
それを聞く力が、おまえにはない、ましてほかの遠くのものは。（68）
おまえに悪意をもつ者と、好意をもつ他の者とを、
知ることはおまえにはできないのに、なぜ高ぶるのか。（69）

ほんの一クローシャ行かねばならぬ場合も、一歩ずつでなければ行けぬ。
母の胎内で起こったことを、おまえはどれもこれも忘れてしまった。（70）
五神通を持つひとを、一切を知る者とこの世ではたたえるが、
おまえは愚かで、何も知らないのに、わたしは一切を知る者、と言う。（71）
一切を知ることを求めるなら、神通力を積むべきである。
神通力を積むためには、林中に住み、汚れのない法を、
瞑想すべきだ。それによっておまえは神通力を得るだろう。（72）
この意味を会得して、林中にゆき、心をよく静めるならば、
五神通に達し、遠からず功徳を成就するだろう。（73）
おなじように、声聞たちがすべて涅槃に達したと考える。
そのときジナはかれに説くだろう、これは休息であって涅槃ではない、と――。（74）
仏たちの方便なのだ、わけがらがこのように説かれたのは。
一切を知ることなしに、涅槃は存在しない。それを試みるべきである、（75）
三世についての無限の智慧と、うるわしい六波羅蜜と、
空であることと、無相であることと、無願であることと、（76）
菩提心についても。また、涅槃にむけられた他の諸法、

有漏・無漏も寂静で、いっさい虚空に似ているが、（７７）
四つの、敬虔な行為や、融和が、宣言された、
衆生たちを訓練するために、宣言されたのだ、最上の聖仙が。（７８）
もろもろのものは、幻や夢を自体とし、
芭蕉の茎のように堅固でなく、やまびこのようなもの、と知る人、（７９）
三界に属するものは、ことごとく、そのようなものを自体とし、
束縛もされず、解脱もしないと知り、涅槃をも考えない人、（８０）
一切の法は平等で、空で、本質的に無差別だが、
観察しようとする心がなく、いかなる法も見ることのない人、（８１）
それが偉大な智慧の人で、法の全体を、あますところなく見る。
三乗というものはなく、一乗があるだけなのだ、この世には。（８２）
一切の法は平等で、一切のものは平等で、つねにまっく平等だ、
このように知って、了解するのである、不滅で楽しい涅槃を。（８３）
以上が聖なる「妙法蓮華」という法門の薬草喩品第五。

yathā hi kaś-cij jāty-andhaḥ sūryendu-graha tārakāḥ /
apaśyann evam āhāsau nāsti rūpāṇi sarvaśaḥ //54//

jāty-andhe tu mahā-vaidyaḥ kāruṇyaṃ saṃniveśya ha /
himavantaṃ sa gatvā ca (W: 'tha) tiryag-ūrdhvam adhas tathā //55//
sarva-varṇa-rasa-sthāmā (W:sthānā) nagāl labhata oṣadhīḥ /
evam ādīś catasro 'tha prayogam akarot tataḥ //56//
dantaiḥ saṃcūrṇya kāṃ-cit (W:kāś-cit) tu piṣṭvā cānyāṃ tathā parāṃ (W:cānyās tathā 'parāḥ /
sūcy-agreṇa praveśyāṅge jāty-andhāya prayojayet //57//
sa labdha-cakṣuḥ saṃpaśyet sūryendu-graha-tārakāḥ /
evaṃ cāsya bhavet pūrvam ajñānāt tad udāhṛtam //58//
evaṃ sattvā mahājñānāj jāty-andhāḥ saṃsaranti hi /
pratītyotpāda-cakrasya ajñānād duḥkha-dharmanaḥ (W:vartmanaḥ) //59//
evam ajñāna-saṃmūḍhe loke sarva-vid uttamaḥ /
tathāgato mahā-vaidya utpannaḥ karuṇ 'ātmakaḥ //60//
upāya-kuśalaḥ śāstā saddharmaṃ deśayaty asau /
anuttarāṃ buddha-bodhiṃ deśayaty agra-yānike //61//
prakāśayati madhyāṃ tu madhya-prajñāya nāyakaḥ /
saṃsāra-bhīrave bodhim anyāṃ saṃvarṇayaty api //62//

traidhātukān niḥsṛtasya śrāvakasya vijānataḥ /
bhavaty evaṃ mayā prāptaṃ nirvāṇam amalaṃ śivam //63//
tām eva tatra prakāśemi naitan nirvāṇum acyate (W: nirvāṇam ucyate) /
sarva-dharmāvabodhāt tu nirvāṇaṃ prāpyate 'mṛtam //64//
maha-ṛṣayo yathā tasmai karuṇāṃ saṃniveśya vai /
kathayanti ca mūḍho 'si mā te 'bhūj jñānavān aham //65//
abhyantarāvasthito 'pi (W:vasthitas tvaṃ) yadā bhavasi koṣṭhake /
bahir yad vartate tad vai na jānīṣe tvam alpa-dhīḥ //66//
yo 'bhyantare 'vasthitas tu bahir jātaṃ (W:jñeyam) kṛtākṛtam /
so adyāpi na jānāti kutas tvaṃ vetsyase 'lpa-dhīḥ //67//
pañcā-yojana-mātre tu yaḥ śabdo niścared iha /
taṃ śrotuṃ na samartho 'si prāg evānyaṃ vidūrataḥ //68//
tvayi ye pāpa-cittā vā anunītāstathā 'pare /
te na śakyaṃ tvayā jñātum abhimānaḥ kuto 'sti te //69//
krośa-mātre 'pi gantavye padavīṃ na vinā gathiḥ /
nātuḥ kukṣau ca yat vṛttaṃ vismṛtaṃ tat-tad eva te //70//

abhijñā yasya pañcaitāḥ sa sarvajña ihocyate /

tvaṃ mohād apy a-kiṃ-cij-jñaḥ sarva-jño 'smīti bhāṣase //71//

sarvajñātvaṃ prārthayase yady abhijñābhinirhareḥ (W:abhijñāṃ ıi nirhara) /

taṃ cābhijñā 'bhinirhāram araṇya-stho vicintaya /

dharmaṃ viśuddhaṃ tena tvam abhijñāḥ pratirapayase //72//

so 'rthaṃ gṛhya gato 'raṇyaṃ cintayet susamāhitaḥ /

abhijñāḥ prāptavān pañca na cireṇa guṇānvitaḥ //73//

tathaiva śrāvakāḥ sarva prāpta-nirvāṇa-saṃjñinaḥ /

jino 'tha deśayet tasmai viśrāmo 'yaṃ na nirvṛtiḥ //74//

upāya eṣa buddhānāṃ vadanti yad imaṃ (W:idaṃ) nayam /

sarvajñātvam ṛte nāsti nirvāṇaṃ tat-samārabha //75//

try-adhva-jñānam anantaṃ ca ṣaṭ ca pāramitāḥ śubhāḥ /

śunyatām animittaṃ ca praṇidhāna-vivarjitam //76//

bodhicittaṃ ca ye cānye dharmā nirvāṇa-gāminaḥ /

s 'āsravā 'nāsravāḥ śārtāḥ sarve gagaṇa-saṃnibhāḥ//77//

brahma-vihārāś catvāraḥ saṃgrahā ye ca kīrtitāḥ /

sattvānāṃ vinayārthāya kīrtitāḥ parama-ṛṣibhiḥ //78//

yaś ca dharmān vijānāti māyā-svapna-svabhāvakān /

kadalī-skandha-niḥsārān pratiśrutkā-samānakān //79//

tat-svabhāvaṃ ca jānāti traidhātukam aśeṣataḥ /

abaddham avimuktaṃ ca sa (W:na) vijānāti nirvṛtim //80//

sarva-dharmān samāṃ(?) śūnyān nirnānā-karaṇ'ātmakān /

na caittān (W:caitāṃ) prekṣate nāpi kiṃ-cid dharmaṃ vipaśyati //81//

sa paśyati mahā-prajño dharma-kāyam aśeṣataḥ /

nāsti yāna-trayaṃ kiṃ-cid eka-yānam ihāsti tu //82//

sarva-dharmāḥ samāḥ sarve samāḥ sama-samāḥ sadā /

evaṃ jñātvā vijānāti nirvāṇam amṛtaṃ śivam //83//

ity ārya-saddharmapuṇḍarīke dharma-paryāya oṣadhī-parivarto nāma pañcamaḥ //

如有生盲者。不見日月星。彼便如是言。無有諸色類。大医於生盲。為其入慈愍。往詣雪山已。上下及傍行。

求得於良薬。順入色味処。如是等四種。和合而療治。或有用歯齧。或有以石磨。或以針入身。療治生盲者。

彼既得眼已。即見日月光。復作如是念。昔時無智説。是流転衆生。生盲大無智。縁生輪所運。無智受苦道。

無智痴世中。如是一切智。如来大良医。出生悲愍体。彼以善方便。演説寂正法。無上仏覚智。演説最勝乗。

広説処中際。中智導師者。怖畏於流転。為讃異菩提。出離三界已。声聞自知住。如是念我得。涅槃無垢安。
当得諸法覚。涅槃甘露処。大仙於彼故。為其入悲愍。告言汝愚痴。莫念我是智。若有於倉舎。汝住彼中時。
外有則不知。汝是小智者。若住彼中時。知外作未作。彼亦未是知。況汝小智者。五蘊闇那量。若有音声出。
汝不能聞彼。何況別遠住。他人於汝所。若愛若悪心。汝不能知彼。如何生普慢。欲向倶盧舎。不歩不能往。
汝胎所有事。汝亦忘彼時。若得五神通。乃名一切智。汝痴無一智。而説是智者。汝欲一切智。出生於神通。
若住空閑処。神通則可出。思惟清浄法。則当得神通。受義詣空閑。思惟入静室。得五神通已。不久具功徳。
如是諸声聞。念得涅槃想。諸仏説彼時。小息非涅槃。是諸仏方便。為説如此道。若離一切智。無有般涅槃。
三世智無辺。六度行清浄。空寂及無相。作願亦除捨。及以菩提心。別法向涅槃。及四種梵行。四摂亦讃説。
為教化衆生。勝仙而説此。若復知諸法。自性如幻夢。不実似芭蕉。亦与音響等。及知彼自性。三界無余残。
不縛亦不解。不知於滅度。諸法平等空。無有異体者。此亦無所見。不観於一法。彼見大智者。法身無余残。
無有於三乗。一乗此中有。諸法皆平等。平等皆等等。知如是智已。涅槃甘露安。

「四つの敬虔な行為」とは、「四無量心」「四梵行」などと訳される慈・悲・喜・捨のことで、その一々については前に述べた。「四つの融和」は、「四摂事」と訳される布施・愛語・利行・同事のこと。布施は、与えること。愛語は、やさしい言葉。利行は、人のためになる行為。同事は、協同すること。仏教を伝道するひとの具えるべき条件である。

なお解説すべきことも多かろうが、ひとまずこれで「薬草喩品」を終わる。

夜

1992 10 19　　原田　慶

山ふところの病院に
消燈の時がきて
廊下を歩くひそかな足音も絶えると
町のざわめきが目を覚ます

急に犬がほえだす
バイクの音がこちらに向かって近づいてくる
さけぶような笛が響いて
バスが帰って行く
大地の底で歯ぎしりするように
アオマツムシが鳴く
病室では眠れない人たちが

そっと寝返りをしている
窓の外のかすかな光の中で
風に背中を押された木の葉が
枝から手を離して落ちていった

わたしはベッドの上にすわり
そのまま伏して
尺取虫のように身をよじる
そして
就寝まえの注射がくせもの
と考えはじめる
インターフェロンとは
ひらひら舞うカゲロウのようなくすり
このからだの中に
幼虫の卵をびっしり産みつけられて
皮膚を喰い破ったさなぎが

無数の羽虫になって
わたしの中から空に向かって吹き上げるだろう
一滴の血液も
ひとのためにさし出すことができないなら
せめて
銀色のしずくを振りまいて飛びたつ
美しい虫の住みかになろう

真夜中
町から人の話し声が聞こえる
バスで団体旅行に出るのかもしれない
声がふくれあがってだんだん騒がしくなってくる
わたしはほんとうに
このベッドの上で
じっとしていなければならないのだろうか

十一月

1992 11 01　原田慶

疲れてうとうとするころ
何事もなかったように
病院の朝がくる

突然つめたい雨が降って
山がぐんと近かづいてきた
黄色に染まった木
緑のままの木
丸いのや先のとがった姿がよく見える
きのうまではアオマツムシが
リイリイと鳴き

カラスが騒がしく行きかい
山はただぼんやりと遠かった

わたしが
雨気をしみこませた枯葉色の上着で
とぼとぼと帰ってくると
走り抜ける自動車が
雨のしずくを振りまいて
わたしをとび退かせた
ピンクの小さな花を
びっしり咲かせた石垣の下に
小川がちょろちょろ流れていて
針さしのような花の山に
老いたカマキリがしがみついている

『袁枚伝』と『風呂』

1992 11 23　原田憲雄

『袁枚伝』は、アーサー・ウェイリー著、松本幸男氏訳注。『風呂』は、楊絳著、中島みどり氏訳注。

ウェイリーがイギリスの東洋学者で、『中国詩百七十首』『源氏物語』の翻訳や、李白や白居易などについての研究によって、二〇世紀前半のヨーロッパ文学に、はげしく深い影響を与えたことは、よく知られている。

本書は、副題に「十八世紀中国の詩人」という。袁枚は、一七一六年、杭州の貧しい知識人の家に生れ、はやくから才能を文壇に知られ、二十四歳で高等文官試験に合格し、皇帝の秘書局とでもいうべき翰林院に入り、地方官に転出しても「普通の人の困難を取り除くために」努力したが、「上官の機嫌を取る」ことを仕事の大部分としなければならない官界の因習に嫌気がさし、三十三歳で退職。南京の小倉山にあった広大な隋氏の廃園を手に入れ、改築して「随園」と名づけ、ここを本拠に、自由主義的な芸術を代表する文人・詩人として、活躍し、一七九七年、八十二歳で死んだ。　かれは、中国のいわゆる正統派の学者や文人の間では、評判があまりよくない。官学である朱子学の厳粛主義や、模倣にすぎない文学の古典主義に対し、批判的であったからである。女性の立場に同情をもち、多くの女性を弟子として、その詩選集を編み、儒教で忌む怪力乱神、グロテスクな奇談を集め「子不語」（孔子のしゃべらなかったこと）と題して出版したり、美女だけでなく美少年をも愛し、演劇を愛し、風景を愛し、音楽を愛し、美味を愛した。

平生最愛月与雪　　終生ずっと月と雪は私が最も愛してきたものである。

月不能留聽其缺　何ものも月を取っておくことはできず、ただ缺けさせておくことができるだけである。
雪更多情来我家　しかし、雪は月より人なつっこく私の客になってくる。
天之所賜敢拜嘉　私どもは天が授けたものはすべて感謝して受け取るべきである。　（蔵雪）

これはかれの考え方をじつによく現わしている。欲望も天の与えたものなら充足するのが当然、というのであろう。儒教にはもともとそのような考え方があったのだろうが、あまりにもあけっぴろげに表現されると、正人君子は眉を顰めた。しかし、これこそがかれの人間としての魅力、作品のおもしろさで、中国の「正統」などに付き合う義理のない空間や時間に生きる人間にとっても興味深いゆえんなのだ。「愛すべく、機智に富み、天才肌で、愛情深く、癇癪持ちのむやみに偏見を持つ男」と、ウェイリーは序文でいうが、読者の多くがこの要約に賛成するだろう。

松本氏が本書の翻訳を思い立ったのは「ただこの欧米人から清朝文学の研究法を学びたかったからに過ぎない」という。清朝にかぎらず、中国の、文学にかぎらず、広く文化を、また人物を、研究し、記述するには、ウェイリーのこの本は見事なお手本であろう。材料を十分に集め、必要なものだけを精選し、やさしい言葉でくっきりと描く。氏はいう。

この訳業を通じて、訳者は袁枚から「詩話」のあり方を教えられた。元来、訳者は宋の厳羽の「滄浪詩話」などを「詩話」の典型と考えていたが、その文学史的展開がどうであれ、結局、「詩話」は詩論に準ずるものではない。「詩話」に欠くべからざるは作者の美的生活である。それが詩趣に富んだ談話となるのであっ

て、「詩」は従、「話」は主である。そういう意味では同じ袁枚の著作でも、「随園詩話」より「随園詩話補遺」の方が生彩を発揮している。訳者はウェイリー著「袁枚伝」でもこの十八世紀の中国人の美的生活に堪能した。それは小説よりも小説らしい。

そのとおりだが、詩を主とする研究や記述においても、学ぶべきことは多いだろう。詩の研究は、言葉の展開の美的享受をその第一の目的とするのであろうから。

さて、そのようにすぐれたウェイリーの本でも、誤りがないわけではない。誤りを正すためには原著が拠った資料と突きあわせなければならない。氏は探究の結果を、綿密な「注・参考文献・出典表・人名索引・書名索引・地名索引・地図」に書き留めている。この仕事の進行中、右眼を失明された由、氏の著作にしては珍しくいくらかの書魚の誤りをまじえるのはそのせいらしい。

楊絳の『風呂』の原題は「洗澡」。著者は「前がき」で次のように言う。

この小説は、解放後知識分子が経験させられたはじめての思想改造——当時、「三反」と通称され、また「ズボンを脱ぎ、尻尾を切る」ともよばれた——を描いている。この知識分子たちは耳がやわにできていて、「ズボンを脱ぐ」というようなもの言いが耳ざわりだったので、「洗澡」（風呂に入る）とよびかえた。西洋人のいわゆる「洗脳」に当たる。

知識分子の改造を描くには、改造以前の彼らの姿を描かねばならない。でなければどこから改造に手がつけられよう。何を手がかりに改められよう？　改造したとすることができよう？

「解放」とは、一九四九年の中華人民共和国の成立をいう。そのころ、北京の出版社のあとにできた「文学研究社」という小さな機関にあつまった、欧米帰りやソ連帰りの知識人の動きを、思想改造を軸に描くのだが、共産主義国の文学によくある教条的で無味乾燥な文章ではなく、静かできめこまかく、たんたんとしてユーモラスな筆で進めていて、それが何よりの魅力になっている。

著者は、一九一一年、開明的で豊かな上層知識人の家庭に生まれ、蘇州の東呉大学の政治学を学び、北京の国立清華大学研究院に進み、外国文学を専攻した。ここで同郷の銭鍾書とめぐりあい、三五年、結婚、同時に夫の欧州留学に同行して渡英、三八年末まで英・佛に滞在、帰国後は上海で英語英文学を教える傍ら、創作も手がけるが、解放とともに清華大学で英文学を講じ、五三年、夫と共に中国科学院哲学社会科学部に移り、以後ほぼ四十年、その職にあった。八〇年、プロレタリヤ文化大革命の間の体験を回想して『幹校六記』を書いた。その中島氏訳が八五年に出たのが、われわれが楊女士を知った最初であろう。『幹校六記』については、『方向』第三九号に簡単ながら紹介した。

本書については、訳者が、巻末の四〇ページにおよぶ注と「あとがき」で、詳細に解説していて、わたしが書いていることもそこからの抜き書きにすぎない。

訳者はこのほかにも、雑誌『颱風』第二六号に「そらまめとお茶」と題する六五ページの論文で、女士のジェイン・オースティンの『高慢と偏見』にかかわるエッセイを紹介しつつ、この小説と比較している。わたしはこの論文につられて、若いころ読んだきりですっかり忘れてしまっていた『高慢と偏見』を読みなおし、おもしろ

かったので『説き伏せられて』を捜し出して読み、つづいて『エマ』もと思って古本屋で買った。あいにくそのころから身辺多事で頓挫しているが、読者をこんな気持にさすところが評論の功徳というものではなかろうか。

『風呂』は、この訳者の手でまず「革命風呂」の題で『颱風』に連載され、「そらまめとお茶」が載った号で第一部が終り、連載が打ち切られた。わたしはオースティンを読んで、第二部以後がしきりに待たれた。『風呂』の刊行でその渇をいやしえた。「革命」がちょんぎられたのは惜しいが、革命ぎらいになった世界の風潮を察した編集者の要請によるのでもあろうか。

『袁枚伝』と『風呂』のあいだに直接のつながりはない。しかし「小説よりも小説らしい」『袁枚伝』と、いかにも小説らしい『風呂』とは、味わいに似たところがあって、あわせて語ってみたくなる。なぜだろう。

『袁枚伝』は、英国の伝統を深く身につけたうえ、東洋の文化、ことに中国の文学に詳しい英国人が書いたものであり、『風呂』は、中国の伝統を深く身につけたうえ、ヨーロッパ、ことに英国の文学に詳しい中国人が書いた小説なのだ。似たところがあって不思議ではない。そうして、似たところとは、ウェイリーが袁枚についていった「その最も快活なときでさえいつも深い感情の低音を有し、その最も悲しいとき、どんな瞬間の明るさのときにも、突然の戯れの閃光を見せる」詩が、やはり女士の作品の主低音となっているからではなかろうか。

主観的な印象を好まないかたには、次の客観的な共通項を提示することもできる。

袁枚が、購って築いた庭園の「随園」、そこに設けた書斎「小倉山房」は、かれの別名として天下に知られ、その庭園と、書斎と、そこに集う男女さまざまの人々が、曹雪芹の小説『紅楼夢』のモデルになったといわれる。

このことは今日の研究者のあいだでは通用しなくなっているようだが、ウェイリーはその伝えによって「随園」の説明をしており、『風呂』のなかにも『紅楼夢』の名が現われる。『袁枚伝』も『風呂』も、『紅楼夢』を生み育てた文学の伝統を受け継ぐ作品といえるだろう。

中島氏は「そらまめとお茶」の「蛇足」で次のようにいう。

「高慢と偏見」を最初読んだとき、正直言ってたいして面白くはなかった。冒頭の数行は、なかなか気がきいているような気がしたが、――漱石は、ここが大層気に入った、と自分で書いている――あとはかなり退屈で、それこそ「故事（ものがたり）」としては事件らしい事件はなし、すじの展開もゆっくりなら、女主人公の心理や行動も、いったいどういうつもりかと思うほどモタモタして見える。途中でめんどうになって放り出しかけた。//しかししばらく放っておいて、またパラパラとあけ、二度目に読むと様子がちがって見える。人物にもプロットにもなじみがでてきたせいか、スローテンポが気にならず、却って細部に注意が行く。そして何でもない片言隻句の言まわしや働きが面白くなってくる。一見平凡な文章の中に智慧や風刺がつまっている。あとでその含意が効（き）いてくる。これは細部を楽しむ小説だ、と思った。//オースティンも楊絳も、そのいみでは「紅楼夢」などと共通するところがあって、超多忙な現代人には向かない、悠長で優雅すぎる小説だ。最低二回、できればもっと多く、くりかえし読むことでだんだん印象が変わり、深まってゆく。優れた作品はもともとそうだと言うけれども、半読もせぬうち、つまらぬと捨てられる今のような時代にあっては、こういうよみ方は贅沢すぎる楽しみということになるかもしれない。

『袁枚伝』も、訳注まで丹念に読めば、そのような贅沢な楽しみを「堪能」することができるだろう。マルセル・プルーストの『失われし時をもとめて』が読みかえされ、ロレンス・ダレルの『アレキサンドリヤ・クワルテット』が版を重ねる日本である。評判の高かった『幹校六記』と同じみすず書房から出た『風呂』に、読者がつかないはずがない。ただ彙文堂のような地味な書店から小部数を刊行して、たぶん広告もしていない『袁枚伝』は、知れば読みたいだろう人の手にも渡りにくかろうと、それが残念である。

なお、これこそまったくの蛇足ながら、袁枚も楊絳女士も、それぞれの時代の最高の教育を受けえた知識人である。不当な政治上の圧迫をうけ、気の毒な時期のあったことは確かだが、しかしおおむねの、その時代、その地域での、精神的にも物質的にもたいへん高く豊かな生活を享受しえた。かれらを圧迫した政治や政策の無智蒙昧は笑うべきにしても、袁枚や楊絳のような教育を受けたくとも受けられず、貧困のなかで生涯を送らなければならない人が、過去にはもとより、今の中国にも何億もいる。「文化大革命」は、愚かしい旋風だったとはいえ、ただ一部の野心家が仕掛けて起こしえたものではなく、社会主義とか共産主義とかいっても、貧しいものはいつまでも貧しく、党幹部などという新しい貴族がのさばるのを、覆さねばならなくなって起こり、貧しい人たちのエネルギーがそこにあふれたのであろう。わたしたちは、その意義まで忘れてしまってはなるまい、と思う。中国は遥かな昔からきわめて政治的な社会を築いてきた。その社会の知識人である袁枚や楊絳女士は、このことを知り抜いている。かれらの優美も優雅も、この認識の上に、苦労して育てたものに違いない。

※前号正誤　一三頁一〇行　とった→といった　　二三頁一二行　そうではないのです→そうではないのです